











お知らせ

- 墓前に供した造花類は、各自でお持ち帰りください。
- 墓地管理人が、月末に放棄された造花や、見苦しい供え物はすべて撤去しますのでご了承ください。

カトリック名瀬納骨堂委員会











































































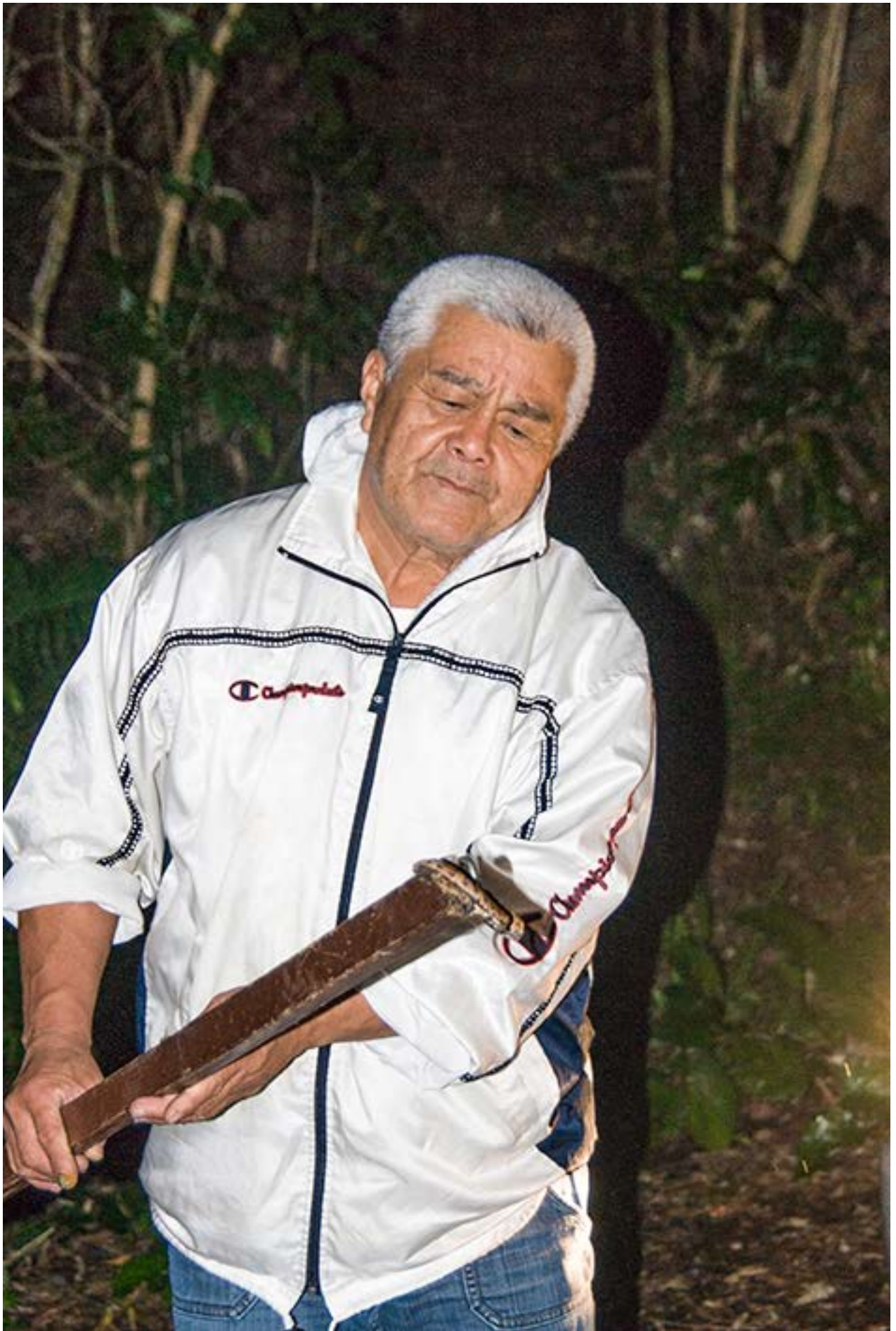




















三太郎峠の由来

「三十年余り前に内地人の夫婦が、この峠に茶屋を建てて附近の林を開墾し始めた。一帯一帯これはその路の名にもついで、三太郎峠と呼ぶようになったのである。それほど世に聞こえた三太郎であったが、彼にも相談せずに世の中は変わった。一帯一帯三太郎はついに茶店をやめてしまったそうである。それから後はどうしているだろうか、峠に上って来てその一家の跡を立ちどまって見ると、二方から踏みこむ店はすっかりしめ切り、出入りの戸をただ一尺ほど開けて、土間へ日が差している。正月だというのに婆さんは風でもひいたか、蒲団をかぶった白髪の頭が見える。囲炉裏のこちらには炭を焚いて、三太郎の三太郎はごろりと寝ている。」 柳田國男「湘南小紀」(大正14年)「三太郎」より

大正10年(1921年)、旧正月の2月9日、柳田は沖縄からの帰途奄美大島を訪れ、ここ三太郎峠の茶屋の前に立った。「ごろりと寝ている」三太郎こと當中三太郎は、安政5年(1858年)薩摩半島の川辺郡田部田村に生まれ、この時63歳、妻シゲ64歳であった。明治22年(1889年)各郡役所に農業技手の配置が始まる。これを契機に、三十代の三太郎は農業指導員として奄美大島へ来島、後に住戸長役職に雇われて西仲間に住み、お茶栽培などの指導に奔走する。そして41歳となった明治32年(1899年)、ここ三太郎峠の山林を入手、開墾をはじめたのである。

峠への山道は、江戸時代のフルミチに代って、明治20年代に住民の手でシンミチが作られ人びとを結んでいた。更に大正6年(1917年)新たな県道が完成し、次第に乗合自動車時代へと移っていくのだが、三太郎夫婦はこの地を離れることがなかった。

昭和7年(1932年)7月、三太郎が倒れ、9月には後を追うようにシゲが鬼籍に入る。三太郎75歳、シゲ76歳であった。二人の墓は峠からも見下ろせる城の内港の入口にある墓所であった。だが昭和14年(1939年)、台風が海へと流してしまった。

このように三太郎の生涯が明らかになったのは、前橋松造著「奄美の森に生きた人」(平成13年刊)によってである。同書の結びには流された墓所を前にした老女の言葉が紹介されている。「ノーギヌイシタ。カゲハシバワタテ、チジチ モドタンダロー。(虹が出た。かけ橋を渡って、峠に帰っただろうね)」

そして今、ここに立つ私たちは、峠を吹く風とともに三太郎夫婦を想いながら、森のしずくと海のかげらを、そっと手に入れることが出来るのです。

平成13年(2001年)5月25日
協力 前橋松造氏
住用村教育委員会



